

# 一国立大学法人医学部における職場巡視結果の経年的分析

井奈波良一，長縄 孝

岐阜大学大学院医学系研究科産業衛生学分野

(平成 21 年 11 月 10 日受付)

**要旨：**国立大学法人医学部における労働安全衛生管理体制の問題点を洗い出す目的で，A 大学医学部で衛生管理者等によって 115 回実施された職場巡視の実施記録を基に，各分野等別に，吉澤ら<sup>1)</sup>の指摘項目分類を一部改変した 13 種類の指摘項目について指摘件数，改善件数，再指摘件数について其々集計した。その結果，臨床系分野の指摘件数が全体の約 6 割を占めていた。また，各分野等の 3 回分の職場巡視における再指摘件数割合は 2 回目より 3 回目の方が基礎系，臨床系，事務系の何れも増加していた。指摘項目件数で最も多かったのは「柵から落下防止」項目であり，ほとんどの分野等で指摘されていた。2 番目は「柵等転倒防止」であった。3 番目は「通路・避難経路の安全」で，室内に物が散乱して通路を狭くし，整理整頓すれば改善される事例が多かった。また，第 4 位に「電気関係の管理」が入り，これの殆どが「タコ足配線」であった。したがって今後も経年的に職場巡視結果を分析し，医学部教職員の職場環境の改善と安全に対する感受性を高める必要がある。

(日職災医誌，58：180—183，2010)

—キーワード—

職場巡視，安全衛生，医学部

## はじめに

近年，国立大学法人は，法人化前にはほとんど意識していなかった職場の安全衛生管理について，労働安全衛生法が適用されたことにより大学内の安全と安心を職員自ら守らなければならなくなり，新たな労働安全衛生管理体制がスタートした<sup>1)</sup>。その一環として産業医，衛生管理者による職場巡視が開始された。しかし，大学という特殊な研究教育機関では様々な立場の人が寄り集まる中で，安全衛生管理体制を推進するのは容易ではない。著者らの印象では，職場巡視が始まった当初は各研究室の職員が何か疑いの眼で巡視の様子をうかがい，職場巡視担当者は少々邪魔者扱いされていた感がある。しかし，職場巡視を重ねるごとに職員の対応も少しずつ変わり，職場環境の改善をして各自が自主的に安全で安心できる職場づくりをしなければならないという意識を持つようになってきた。そこで，これまで行ってきた医学部各分野等における職場巡視指摘事項について，指摘件数及び指摘項目の改善状況について経年的に集計して安全管理体制の問題点を洗い出し<sup>2)</sup>，職員の職場での安全衛生に対する意識をより一層高めてもらう視点から考察した。

## 対象と方法

A 大学医学部の各研究室では，特定化学物質・毒物・劇物・引火性薬品等の多量少量な危険薬品を日常の研究実験で使用されている中，衛生管理者等による職場巡視で研究室内での様々な安全衛生上の改善点が指摘され，リスク低減に努めてきた安全衛生管理活動について分析した。具体的には，平成 19 年 4 月から平成 21 年 9 月までの対象期間に衛生管理者等によって 115 回実施された職場巡視の実施記録を基に，各分野等別に，吉澤ら<sup>1)</sup>の指摘項目分類を一部改変した「柵等転倒」，「柵から落下」，「4S」など 13 種類の指摘項目について指摘件数，改善件数，再指摘件数について其々集計した。

有意差検定は， $\chi^2$ 検定または Fisher の直接確率計算法を用いて行い， $P < 0.05$  で有意差ありと判定した。

## 結 果

医学部の基礎系分野と臨床系分野及び事務系に分けて指摘件数を集計してみると（表 1）と，臨床系分野が約 6 割を占めていた（図 1）。

表 2 および表 3 には各分野等の 3 回分の職場巡視における指摘件数，改善件数および再指摘件数を示した。再

指摘件数割合は2回目より3回目の方が基礎系、臨床系、事務系の何れも増加していた。

指摘項目件数(表4)で最も多かったのは「柵から落下防止」項目であり、ほとんどの分野等で指摘されていた。2番目は「柵等転倒防止」であった。3番目は「通路・避難経路の安全」で、室内に物が散乱して通路を狭くし、整理整頓すれば改善される事例が多かった。また、第4位に「電気関係の管理」が入り、これの殆どが「タコ足配線」であり、コンセントの発熱や火事の原因にもなりうる危険な行為である。各項目の指摘率については、基礎系分野と臨床系分野の間で有意差はなかった。

第3回巡視で改善指摘を受けた項目の未改善件数(再指摘件数)(表5)で最も多かったのは「柵から落下防止」項目であり、2番目は「柵等転倒防止」であった。3番目は「通路・避難経路の安全」と「電気関係の管理」であった。

表1 職域別指摘件数

巡視場所	指摘件数	%
臨床系	512	59.5%
基礎系	307	35.7%
事務系	42	4.9%
合計数	861	

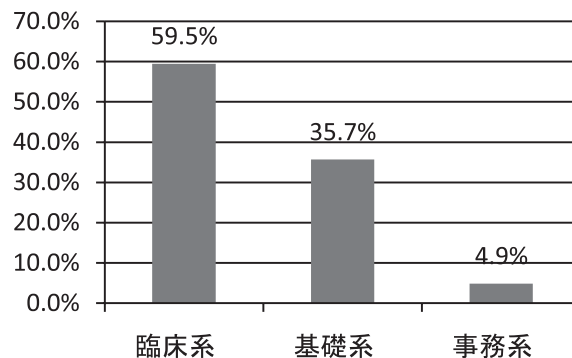


図1 職域別指摘件数

表2 職場巡視結果

平成19年度(第1回), 平成20年度(第2回), 平成21年度(第3回)

巡視場所	第1回		第2回		第3回		
	指摘件数	改善件数	再指摘件数	新指摘件数	改善件数	再指摘件数	新指摘件数
臨床系	239	203	36	112	92	56	161
改善率		84.9%			62.2%		
基礎系	172	151	21	61	56	26	74
改善率		87.8%			68.3%		
事務系	16	10	6	15	14	7	11
改善率		62.5%			66.7%		
合計	427	364	63	188	162	89	246

表3 職場巡視改善結果

(第3回新指摘件数は除く)

巡視場所	指摘件数	改善件数	%	再指摘件数	%
臨床系	351	295	84.0%	56	16.0%
基礎系	233	207	88.8%	26	11.2%
事務系	31	24	77.4%	7	22.6%
合計	615	526	85.5%	89	14.5%

表4 職場巡視指摘項目別件数

指摘項目 巡視場所	柵等 転倒	柵から 落下	4S	電気 関係	薬品 管理	通路の 安全	掲示 関係	機器の 安全	衛生・ 保護具	廃棄物 処理	ガス・ ボンベ	VDT 関係	その他	合計
	臨床系	134	196	12	55	32	46	10	2	10	0	12	2	1
%	26.2%	38.3%	2.3%	10.7%	6.3%	9.0%	2.0%	0.4%	2.0%	0.0%	2.3%	0.4%	0.2%	
基礎系	70	130	7	26	13	33	5	7	4	2	6	2	2	307
%	22.8%	42.3%	2.3%	8.5%	4.2%	10.7%	1.6%	2.3%	1.3%	0.7%	2.0%	0.7%	0.7%	
事務系	10	14	3	3	0	7	1	0	2	1	1	0	0	42
%	23.8%	33.3%	7.1%	7.1%	0.0%	16.7%	2.4%	0.0%	4.8%	2.4%	2.4%	0.0%	0.0%	
合計	214	340	22	84	45	86	16	9	16	3	19	4	3	861
%	24.9%	39.5%	2.6%	9.8%	5.2%	10.0%	1.9%	1.0%	1.9%	0.3%	2.2%	0.5%	0.3%	

表5 改善指摘を受けた項目の未改善件数

指摘項目	棚等 転倒	棚から 落下	4S	電気 関係	薬品 管理	通路の 安全	掲示 関係	機器の 安全	衛生・ 保護具	廃棄物 処理	ガス・ ボンベ	VDT 関係	その他	合計
未改善件数	22	43	4	7	2	7	1	0	0	0	2	0	1	89
%	24.7%	48.3%	4.5%	7.9%	2.2%	7.9%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	2.2%	0.0%	1.1%	

## 考 察

A 大学医学部では職場巡視は、週1回のペースで、平成21年度までに各分野当り3回行われたが、指摘項目の改善率が経年的に悪くなっている傾向があった。この原因のひとつとして最も指摘件数が多い「棚から落下防止」の改善が多く分野で実施されていない点が挙げられる。実際、再指摘項目件数でも「棚から落下防止」項目が最も多かった。原因として室内がそれほど広くない故に、棚やロッカーの上にある荷物を下ろして保管するスペースがないことが原因と思われる。この対応策のひとつとして室内の不必要な物を整理整頓して限られたスペースを有効に利用し職場の安全管理を徹底してもらうことが考えられる。

タコ足電気配線が比較的多くの分野で行われており、以前にタコ足配線が原因でコンセント部品が高熱化し、コンセントからの発火の恐れもあったことからタコ足配線の危険認識の薄さを感じられた。

実験室内では毒物・劇物薬品や有機溶媒の保管状況が悪く危険物の保管管理を徹底しなければならない。しかし、著者らの印象では、研究者の中には、毎日の実験の中で法規制を受けている危険な化学薬品等を使用しているという認識が薄い者がおり、安全に取り扱う局所排気装置施設があるにもかかわらず、自己流に危険な実験行為を行っていることが認識されていないようであった。その一例として、実験台において試料をアンプルに封入作業中にガスバーナーの火が近くに置いてあった蓋をしてない有機溶媒瓶に引火して発火する事故が発生しており、一人の不注意から発生した事故が所属分野だけでなく組織全体に危険・混乱等の様々な影響を与えることを重く認識しなければいけない。事故が発生してからでは遅いことから、職場巡視による安全管理指導を周知徹底するためにも、各分野責任者へのリスク管理指導を厳格化しなければならない<sup>3)4)</sup>。

A 大学医学部では各分野等の職場巡視実施結果については、指摘項目に関する写真入りの巡視報告書とし、

医学部長、安全衛生委員長等で確認後、其々の分野等責任者に報告書を渡して指摘項目の改善を促していた。今回の分析結果を安全衛生委員会で審議し、今後、指摘項目の改善率を高めるために、期間を定めて各分野から改善結果報告書を提出してもらうことになった。

## ま と め

臨床系分野と基礎系分野の指摘件数を比べると臨床系の指摘件数が比較的多く改善率も悪かった。この要因として臨床系の方が分野一室当たりの人口密度が高いことから多量の資料等の荷物、多人数分の什器類の設置によって部屋が狭くなり通路の確保が十分でない、多数の電気コンセントを使用等の要因が重なり、さらに病院業務の繁忙により身の回りの安全管理意識が低いことが要因の一つと考えられる。

今後も経年的に職場巡視結果を分析し、大学教職員に有効な安全衛生教育・研修を実施して職場環境の改善と安全に対する感受性を確実に高めていかなければならない。

## 文 献

- 1) 古澤真美, 梅景 正, 大久保靖司: ある国立大学法人における産業医職場巡視指摘内容の検討. 産業衛生学雑誌 51 (臨時増刊): 504, 2009.
- 2) 竹田 透: 産業医の職場巡視. 産業医学レビュー 22: 55—68, 2009.
- 3) 平野敏右: 研究機関における安全衛生管理の現状と課題. 安全と健康 8: 1065—1070, 2007.
- 4) 長谷川紀子: 東京工業大学における安全衛生管理の推進. 安全と健康 8: 1071—1078, 2007.

別刷請求先 〒501-1194 岐阜市柳戸1-1  
岐阜大学大学院医学系研究科産業衛生学分野  
井奈波良一

## Reprint request:

Ryoichi Inaba  
Department of Occupational Health, Gifu University Graduate School of Medicine, 1-1, Yanagido, Gifu, 501-1194, Japan

## **Chronological Analysis of the Results of Walk through Survey in a National University Corporation School of Medicine in Japan**

Ryoichi Inaba and Takashi Naganawa

Department of Occupational Health, Gifu University Graduate School of Medicine

To dig out the problems in the occupational safety and health management system of a national university corporation school of medicine in Japan, the numbers of cases pointed out, numbers of improvement and the numbers of cases pointed out again, in 115 records of the walk through survey practiced by the occupational health managers, were analyzed in the A national university corporation school of medicine. Numbers of cases pointed out in the clinical departments accounted for about 60% of the total numbers pointed out. Numbers of cases pointed out in the third walk through survey were increased compared with those in the second walk through survey. Four main items pointed out were prevention against falls from racks, prevention against fall of racks, rockers and etc, problems of a safety measure concerning passages and routes of refuge and management concerning electricity. These results suggest that it is useful to analyze chronologically the results of walk through survey and heighten the consciousness of staffs for the improvement of work environment and the safety in the school of medicine.

(JJOMT, 58: 180—183, 2010)